一　大きな理想をもち

北海道開拓に情熱をかたむけた　島　義勇（一八二二～一八七四）

「もはや、藩のことだけを考える時ではない。日本の将来のことを考え世界に目を向けるべきだ。義勇、しっかりその目でエゾ地（今の北海道）を調べてきてくれ。」

島　義勇（北海道大学所蔵、佐賀新聞社提供）

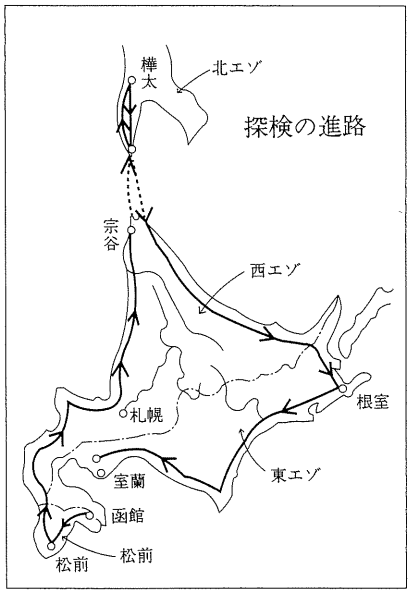
島義勇が北海道探検に向かったのは、安政三年（一八五六）九月のことでした。日本とロシアとの国境について心配していた藩主鍋島直正の命によるものでした。

義勇は、佐賀市与賀町精小路に生まれました。九歳の時、※藩校弘道館に入学し、学問や武道にはげみ、二十三歳で卒業しました。しかし、学問への思いが強く、卒業の後も三年間、各地で勉強しました。そして、自分が正しいと信じることは、かならず実行するという強い信念を持つようになりました。

そのころの北海道は、函館ふきんにしか人は住んでいませんでした。はてしなく続く原野と森林におおわれ、狼は群れをなし、熊が歩き回るさびしい所でした。冬は、氷や雪にとざされ、気温も零下二十度にも三十度にも下がりました。

しかも、北海道は、幕府の役人か商人しか出入りすることがゆるされていません。そこで、義勇は役人にたのみ、三名の供を連れてこっそりはいりました。役人の家来にまぎれこんだ義勇は、安政四年五月ごろ函館を出発しました。

北海道に移住した人のくらし
（北海道大学所蔵、北海教育評論社提供）



多い時には一日およそ八十キロメートルも歩き、函館の西の海岸ぞいを探検し、宗谷をへて樺太（サハリン）へわたりました。それからふたたび船で宗谷にもどり、北東の海岸を回って根室から室蘭に帰り着きました。半年あまりをかけて、二千キロメートル以上を、毎日歩き通したのです。

せいの高さほどもあるすすきやかやなどをかき分けながら山道を歩いていて、とつぜん熊におそわれたり、野宿で蚊やあぶに苦しめられたりしたこともありました。また、冷たい夜つゆにぬれながら、岩かげにこしかけたままねむることもありました。ある時は、食べ物もなく、草や木の芽を食べて歩き続けました。しかし、義勇は多くの困難とたたかいながらも、土地の様子や道のり、アイヌの人のくらし、草木、動物、魚貝、気候などを調べました。そして、それを絵図やスケッチに表して、「入北記」という日記四冊に、くわしく書きとめました。

安政五年（一八五八）正月、北海道探検から佐賀に帰り着いた義勇は、休む間もなく藩主直正のもとへ急ぎかけつけました。

「殿、エゾは海産物の宝庫であり、わが国の北の守りの大切な所です。ロシアとの国境もまだ定まっておらず、アイヌの人たちも苦しんでいます。早くこをおさめないと、百年の悔いを残すことになりましょう。何はさておいても、この地を開拓し、アイヌの人たちのくらしを守るべきです。」

アイヌの人（「入北記」より）

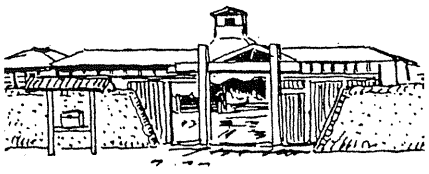
と熱心にうったえました。しかし、そのころの日本は、武士の世の中から新しい世の中へと大きく変わろうとしていました。そのために義勇のうったえは、すぐ実行されることはありませんでした。

それからおよそ十年後、世の中は大きく変わり、明治となりました。明治二年（一八六九）七月、政府は「北海道開拓使」という役所をつくり、直正を長官に、義勇を首席※判官ににんめいしました。いよいよ北海道の開拓にのりだしたのです。苦しかった探検を生かす時がきたのです。義勇は、

「自分の命にかけても、この地に、世界に知られるような大都市をつくろう。」

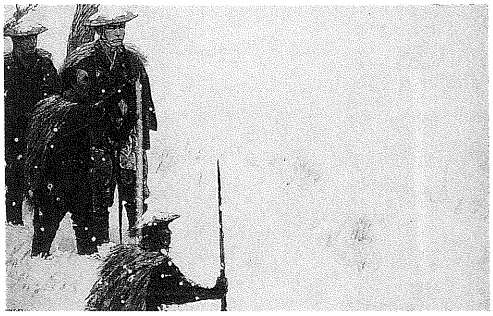
と決心しました。そして、病気のために長官をしりぞいた直正の思いも心にひめて、出発しました。

義勇は、開拓するための中心地を札幌に決めて原野を切り開き、役所や都市づくりのための準備にとりかかりました。義勇の都市づくりの計画は、北海道の将来を考えた、これまでの日本にはなかったような大きなものでした。町の南北を大きな道でくぎり、それぞれの区域に、役所や商店や住宅をつくろうというものでした。



明治４年ころの仮庁舎の図

工事にかかった日は、朝からしんしんと雪がふり、野も山もまっ白で、こしまでうまるほどでした。しかも、雪と寒さの中での工事は、困難をきわめました。昼間やりかけた仕事は夜には雪にうまってしまいました。また馬に食べさせるえさが雪にうまり、木の皮をはいで食べさせました。そのほかに資材の確保など、いろいろ困ることがありました。



札幌の都市づくりをしきする島義勇
（北海道庁所蔵、佐賀新聞社提供）

しかし、義勇は、工事の時はいつも先頭に立ち、はたらいている人たちの食料を求めて自らかけ回ったり、寒さをしのぐために、ほかの人と同じように犬をだいてねたりすることもありました。義勇の、この札幌の都市づくりにかける情熱は、やがてまわりの人たちにも伝わり、仕事は夜もおこなわれました。そして、はば十八メートルもある大きな道がつくられていきました。

しかし、このように大変な工事であったため、一年分の費用をわずか三か月で使いはたしてしまい、半年で首席判官の職をやめさせられてしまいました。

「広大なこの地には、大きな都市の建設が必要なのだ。北海道のため、これからの日本のため、この手でこの仕事をやりとげたかった。」

義勇は残念でたまりませんでした。義勇が北海道を去った後、義勇の計画は、苦労をともにした人々に受け継がれ、りっぱにその形をととのえ、今、札幌は、百七十万の人口をもつ北の大都市となっています。

大きな理想をもち、北海道開拓に情熱をかたむけた義勇は、今も、「開拓の父、島判官」としてしたわれています。

島義勇像（北海教育評論社提供）

今の札幌のまち（北海教育評論社提供）

明治４年のころの札幌（北海道大学所蔵、北海教育評論社提供）